



三重県公立小中学校教頭会
〒514-0003 津市桜橋2丁目142
教育文化会館別館3階
TEL 059 (228) 2340
FAX 059 (228) 2271
E-mail:mieheadt@hyper.ocn.ne.jp



今年度もあと数えるほどになりました。皆様におかれましては、本年度の教育実践のまとめや次年度に向けての準備等お忙しい日常をお過ごしのことと思います。今年度は平成から令和へと移行された年であり、気持ちのうえで教頭会が新たな一步を踏み出す年であったと思います。仲間の大切さを実感した私たち役員8名が、この1年間のりをきることができましたのも、会員の皆様をはじめ多くの方々のご理解とご支援があったおかげです。心から感謝いたします。

12月7日（土）に、松阪市で開催されました三重県公立小中学校教頭会研究大会は、松阪市教頭会が総力を挙げて準備・運営に取り組んでいただき、実践を持ち寄った先生方の活発な話し合いと交流をもとに、助言者の方々がより充実したものにしていただきました。この機会は、県内の教頭がつながりを深め合う場であることはもとより、日ごろの実践を広げ、個々の力量を高め、確かめ合える場であることを実感しました。開催にあたりまして、ご尽力いただきました松阪市教頭会の皆様をはじめ、お力添えをいただきました皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございます。

また、今年度の取組としては、教頭会の働き方改革の一端として、この研究大会の平日開催

と会場の統一化を考えました。詳細等は今後、精査する必要がありますが、令和3年度から新たな研究大会として、まずは、3年間を進めていきたいと思っております。これは、毎年積み重ねてきた「教頭に関する調査」、アンケート等会員の皆様が迅速に対応していただいた結果であると考えています。各支部で時間をとっていただきましたこと、取りまとめていただきました理事の皆様、本当にありがとうございました。

さて、来年度第12期1年次にあたる「岡山大会」は、全国統一主題「未来を生きる力を育む魅力ある学校づくり」をもとに、サブテーマを「豊かな心と未来を拓く力を育む 開かれた学校づくりの推進」と設定されています。第11期の研究成果や課題を踏まえながら、不易を求めると同時に、昨今の新たな喫緊の課題に真摯に向き合うことが大切です。まずは、現在の自分を見つめ直し、私たち教頭が自信と誇りをもって笑顔で働くことのできる学校づくりを進めましょう。

最後に、8名の仲間とともに1年間無事に活動できたことに感謝しつつ、会員の皆様のご健康とご活躍を祈念いたしまして、心よりお礼を申すべく、挨拶とさせていただきます。

第47回

東海・北陸地区公立学校教頭会研究大会 (愛知大会)

第1分科会

「教育課程に関する課題」に参加して

松阪市立松ヶ崎小学校 西出 雅子

本分科会では、2つの提言を受け研究協議を行った。

1つ目は、岐阜県可児郡三嵩町の1中3小学校からの「小中の連携を充実させるための教育課程と教頭の役割」についての提言だった。

可児郡には3つの中学校区があり、それぞれに継続的な指導を目指して、小中連携を行っている。特に、学力向上推進事業に力を入れており、その推進を教頭会が担当している。具体的には、教職員の校種間交流についてや、学習指導・生活指導に関わる計画を立案する。また、児童生徒の交流については、合同行事や交流授業をしたり各校の授業改善や児童生徒の様子を交流したりするなどをしている。その中で、授業や児童生徒についての交流をするために月1回郡教頭会を行っているということが、小小・

小中連携を充実させているのだと感じた。

提言を基にグループ討議で、「学校規模を生かした小中連携を充実させていくために、教頭としてどのように働きかけを行っていくか。」という視点で話し合いをした。中学校進学への不安を取り除くためや不登校対策として、中学3年生が卒業後その教室を使って6年生が1日中学校体験をする児童生徒交流や、教師間の交流としてレクリエーションをしている学校、勤務異動が小学校から中学校・中学校から小学校という異校種異動をしている市などの話を聞いた。

2つ目は、愛知県犬山市の小学校から「カリキュラムの見直しと再構築のための教頭の役割—継続性・協働性を高めるマネジメント—」についての提言だった。

カリキュラムマネジメントをするにあたっては、小中連携の視点を持って、9年間を通してどのような力を育てていきたいかについて、共通の目標を持ち、学校間や家庭・地域との繋ぎ役を担っているということだった。その中で、「先生たちにやりたいという気持ちになるように火をつけることと、状況によっては先生たちがやりたいという気持ちをセーブすることの両方を意識している。」と話されたことが印象に残っている。その後のグループ討議でも、教頭はコーディネーター役であることで事務量を増やして



しまわないような意識づけが大事だという意見が出た。

グループ討議は、とても和やかな雰囲気楽しく会話も弾み、他県の取組やそれぞれの学校

での仕事内容や仕事をたくさん聞かせてもらっているいろいろなことが勉強になった2日間だった。

第2分科会

「子どもの発達に関する課題」に参加して

四日市市立神前小学校 山中 誠

第2分科会「子どもの発達に関する課題」に参加しました。260名程の参加者が32のグループに分かれ、2本の提言をもとに意見交換が行われました。

1本目は、福井市立清水中学校、豊小学校、旭小学校それぞれの教頭より「地域に根ざす円滑な園小中接続のありかた」というテーマでの提言でした。働き方改革の視点をもって、園小中の連携を進めていく中で、教頭としてどのように取り組むのかを考え合うものでした。福井市では、「学びの一貫性」を核とし、「系統性のある学び」「地域に根ざした学び」に視点を当て、地域と連携した教育活動を推進しています。その中で、園小中の連携の重要性はどの教職員も理解しているが、連携を継続した取り組みにするために負担感を少なくしようと考えたそうです。子どもの交流、教職員の交流の機会を新たに作るのではなく、既存の活動を見直すことで交流の場を位置づけるようにする等、活動が円滑に進むように、教頭がカリキュラム作成の中心となって働きかけているとのことでした。

2本目は、新城市立新城中学校の丸山教頭が中学校区の取り組みを代表して「地域・PTAと協働で子どもを育てようー共育活動を支える教頭の役割ー」というテーマでの提言でした。学校を拠点として地域が主体となった活動へ発展させるために、教頭としてどのように取り組

むのかを考え合うものでした。新城市では、学校を拠点に学校・家庭・地域が力を合わせて、共に過ごし、共に学び、共に育つ活動により「人がつながり、地域が元気なること」を「共育」と考えているそうです。そのねらいは、児童生徒数の減少が続き学校統合が進んでいて、地域のよさに気づき、将来地元で活躍する人材を育てることにあるようでした。活動は地域と共通のねらい（活動の意味や価値）を持つことが大切で、それを教職員と共有し、教職員の意識を変えるのも教頭の役割だとグループでも確認しました。

本分科会に参加させていただき、改めて教頭としての役割について振り返ることができました。また、助言者が話された中学校区での取組は「組織作りから絆づくりへ」という視点等、新たな気づきを得ることができ有意義な研究大会となりました。



第3分科会

「教育環境整備に関する課題」に参加して

紀北町立紀北中学校 川 端 裕 也

他県への出張の楽しみのひとつはご当地名物を味わうことです。もちろん仕事で行く訳なので、それだけという訳にはいきません。そんなことを考えながら遙々東紀州から名古屋に向け出発しました。

大会2日目の分科会、会場は名古屋国際会議場。コンサートぐらいでしか入ったことがない私は、少し緊張しながら第3分科会会場に入りました。第3分科会は「教育環境整備に関する課題」ということで、富士市教頭会から「小中一貫教育推進の取組が、名古屋市教頭会から子どもが安心安全に過ごせる環境整備の取組」の報告がなされました。

富士市では「学びの共同体」の先進地域らしく16の中学校区で、“つなく”をキーワードに児童生徒、教職員、学校、地域それぞれをつなぐ取組がなされているということでした。いっぽう名古屋市では、登下校の安全や地域防災、防災教育の推進に関わる取組の報告がなされました。

報告、質疑応答のあと8人程度でのグループ

討議を行い、各地域での情報・意見交流が行われました。私のグループでは安心安全についての環境づくりに関する情報交流や意見が多く出されました。特に地域防災の要としての学校のあり方、防災学習での地域との関わり—例えば生徒が地域や行政の力を借り作成した防災マップをネット上で公開し、地域に返したり、避難訓練を総合防災訓練として学校だけでなく地域と一体となって実施していくなど、学校と地域が双方向につながっていくことが大切なのではないかとまとめられました。また、こうした学校と地域との双方向のつながりの積み重ねが、CSの充実につながっていくのかもしれないという意見も出され、その通りだと感じました。

記念講演、分科会の素晴らしい内容に加え、天候にも恵まれ、充実の2日間を過ごすことができました。もちろん、ご当地の有名店で、世界の〇〇もたっぷり味わうこともできました。本当に“頭”も“おなか”も大満足の大会でした。感謝。

第4分科会

「組織・運営に関する課題」に参加して

桑名市立城南小学校 栖 村 太 志

私が参加した第4分科会では、2つの視点での提言と話し合いが行われました。

- ① 働き方改革・業務改善を意識した組織・運営の強化に教頭はどのようにかかわればよいか。
- ② 働きやすい職場となるよう、非正規職員の

方々への教頭としての配慮や工夫をどのように行っていたらよいか。

提言発表の後に行われたグループごとの話し合いでは、各校の実情をもとに、教頭としてどのように取り組んでいるかを交流しました。学校の苦しみをさらけ出す中で、外部の組織に理

解されていった取り組み事例や、給食時を利用した「ランチタイムミーティング」の事例など、今後参考にしたいと思う話を聞かせていただくことができました。

また、この話し合いの中で「コミュニケーション」と「情報共有」がとても大切だということが改めて共有されました。

分科会のまとめの中では、「組織を作った後、機能させていくために大切なこと」という助言者からのお話が印象に残りました。

「そ」…「その気にさせる（特にリーダー）」

「し」…「思考する（担当者の持ち味や工夫を



大切にしてください）」

「き」…「機会を見つける（活躍できる場）」
心に留めていきたいと思いました。

第5分科会

「教職員の専門性に関する課題」に参加して 教職員の資質向上に向けた研修と教頭の役割

度会郡玉城町立田丸小学校 小林 一彦

初めに、松阪市立掃水小の石井典子教頭から、教職員の個々の強みを生かした研修を行うことで、教職員の弱みを補い専門性を高める取組が報告されました。その中で、児童理解の取組は大変興味深いものでした。それは、教職員一人ひとりが毎日ひとつ、どんなことでもいいから児童のいいところ（場面）を見つけてデータとして残しているという取組でした。そうすることで、教職員は全ての児童のいいところをいつでも見ることができます。また、この取組によって教職員の児童の見方がプラス方向で見よう変わってきたという効果も紹介されました。

名古屋市立太子小の早川加代教頭からは、授業力向上に焦点を当てた取組が報告されました。まず、学年や児童の実態、若手教員と中堅教員のバランスを配慮し、数名単位の部会に分け、それぞれの部会で若手教員が授業者、中堅教員が助言者となり指導計画や教材研究、授業実践に取り組むというものでした。働き方改革が叫

ばれる中、限られた時間でこれまでの教育水準を保つために、中堅教員が若手教員を育てる場面を確保する工夫をしているというものでした。

後半は、「働き方改革を進めながら、次世代を担う人材育成のための研修の活性化を、教頭としてどのように行っていけばよいか。」「働き方改革が進む中、教職員全体の資質向上を図るために、果たすべき教頭の役割はどのようなものか。」についてグループで討議しました。特徴ある研修を出し合う中で、年間7回、勤務時間終了後に30分ほど教員が得意分野を語る機会を設定しているということが紹介されました。自由参加でお茶会のような楽しい研修ができており、好評であるということでした。

教頭の役割としては、教職員の個々の強みを生かした研修を行うために、校内の教職員の中から講師を選び依頼すること、研修に対して教職員のモチベーションを高めるための支援を行うこと、近隣の学校と連携し合同研修会をした

り学校の実態に応じたタイムリーな研修を計画することなどが出されました。しかし、働き方改革の中、どの学校でも研修時間の確保に苦しんでいるという共通の悩みも確認されました。

助言者からは、少し前までミドルリーダーであった自分たちの実践例を研修に生かすこと、

役に立ったことだけでなく失敗したことも伝えていくことが大切である。また、管理職であるという自覚のもと、教職員一人ひとりをよく知ることが重要で、個々の教職員の強みを生かしたり個々に働きかけたりすることが全体の資質向上に繋がるとアドバイスをいただきました。

第6分科会

「副校長・教頭の職務内容や職務機能に関する課題」に参加して

津市立桃園小学校 上野毛戸 靖 人

2日目（11月1日）の分科会の研究課題は、「副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題」で、富山県立山町小中学校教頭会立山町立釜ヶ淵小学校、豊田市小中学校教頭会豊田市立衣丘小学校の2つのレポート提案がありました。その後、1グループ7～8人に分かれて、協議を行いました。

私が参加した第16グループでは、「学校のプラス面を創り出し、保護者・地域から信頼される学校づくりを推進するために、教頭としてどのようにかかわったらよいか」ということを中心に、各県各小中学校の取り組みを交えながら協議が進められました。

そこでは、地域講師の活用と教頭の役割について、地域と交流する中での情報収集とその対応について、行政との連携と予算について等の多面的な意見交流がされました。学校からの発信を様々な場においてしていく必要があること、学校任せにしないという雰囲気地域に持ってもらうことの大切さを発信すると共に地域の要望等にいかに対応していくのか等、教頭として大切なことを再確認することができました。

約1時間のグループ討議を終え、助言者である愛知県豊川市立小坂井中学校 井上正英校長から、①教頭が主となる業務について、②職務内容と職務機能の関係性について、③組織の形成条件と教頭のコミュニケーションについて、

④校務分掌を担当する職員一人ひとりに全体を俯瞰させることについて、⑤情報の一元化について等の指導・助言をいただきました。学校組織を構築する手法や実際の組織作りは大切ではあるが、どのように教頭が介入し組織を機能させていくかが大切であること、組織は常に最悪の想定をして臨むこと等、教頭として担うべき業務についての話は、とても参考になりました。

2日間、学校へ迷惑をかけることを感じながらの参加ではありましたが、1日目の記念講演の言葉にあったように「教育は、いかにしてその人の人間力を高めるか、数字で表せない力こそ人間の力である」を心に置き、今後、学校において、教頭として、教職員に共通目的を持たせると共に、円滑なコミュニケーションをとりながら、個々の相関化を図っていきたいと考えているところです。



第41回 三重県公立学校教頭会研究大会 (松阪大会)

第1-①分科会

「教育課題に関する課題」に参加して

菰野町立菰野小学校 梁 井 桂 子

「小中一貫教育をめざした各校連携のあり方と教頭の役割」という主題で、津市立草生小学校山本博教頭先生から提言がありました。東観中学校区（幼保4園・小学校4校・中学校1校）で地域教育推進協議会（地推協）を中心に進めている取組でした。組織がしっかりとしているため、各部会に分かれている職員の意識も高く、学力向上や基本的な生活習慣に関する指導等において、9年間を通して教育活動が行われていることが有効であると思いました。特に「ノーマディアデー」や、朝読・図書ボランティアを活用した読書活動の推進、「生活リズムカード」を小1から中3まで一貫して取り組むなど、小学校の取組が中学校での取組にスムーズに移行できると感じました。

助言者の三重県教育委員会小中教育課尾上修一様からは、「小中一貫」と「小中連携」との違いについて言及があり、小中一貫教育は「小中学校が9年間を通じた教育課程を編成して教育を行うこと」で、小中連携は「小学校から中学校への円滑な接続をめざす教育であること」を再確認することができました。教育内容や学習活動の量的・質的充実のためや、発達の早期化に関わる現象、中1ギャップなどの問題において、今「小中一貫教育」が求められている背景



について知り、その必要性を痛感しました。

また、9年間を通じた教育課程には、「一体型」と「分離型」があることを教えていただきました。「分離型」は、各小学校で異なる教育課程であっても、小学校卒業時に、中学校を卒業する時点のめざす姿からさかのぼって、「3年前に実現したい子どもの姿」をめざす教育課程であれば、小中共通の教育課程を編成していることになるということでした。学習面・生活面にわたるすべての教育活動を進める上で、9年間を通じた教育課程を編成することは、15歳の時にどんな子どもたちに育ってほしいかという共通のビジョンを持つことであり、そのことがいかに大切であるかを再認識しました。

分科会のグループ討議では、小規模校、大規模校、校種の違う学校の教頭先生方と情報交換

をすることで、それぞれの学校での取組が参考になったり、地域は違っていても思いは同じであっ

たりして、元気をいただける話し合いとなりました。

第2-①分科会

「子どもの発達に関する課題」に参加して ～一人ひとりの笑顔と元気を支えて～

津市立高野尾小学校 小久保 博 司

県教頭会研究大会第2分科会①「子どもの発達に関する課題」主題「一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援の在り方について」に参加して、改めて教頭としての働きかけの重要性を認識しました。この分科会は、小規模校特認校制度を利用する美杉中学校からの提言でした。従来の通学区域を越えて、津市内のどこからでも生徒を受け入れています。少人数のよさを生かして、きめ細かく指導し、悩みや相談があればじっくり話を聞き、当該学年だけでなく全学年で対応する体制ができていました。その中で教頭として、生徒、保護者、地域との関わり、組織が動くためのコーディネート、関係機関とのパイプ役など参考になることが多くありました。できる限りの授業参観やどんな時もまずは傾聴する、月に2回程度の気になる生徒（保護者）への教

頭としての電話連絡など見習わなければならない姿勢でした。「どんなに人数が少ない規模の学校であっても、児童生徒一人ひとりの悩みや葛藤が小さいわけではない」「児童生徒が丁寧に勉強を教えてもらっていると感ぜられる」「児童生徒が自分を受け止めてくれる人がいるという思いを持つことができる」という発言を、小規模校の本校としても常に考えていかなければならないと思いました。

グループ協議、報告の中では、これまでやってきたものではなく、目の前の子どもに何が 필요한のかを取捨選択すること、集団の実情に応じた「場と機会」の提供、同僚性を高めること、ミドルリーダー育成の必要性、子どものSOSを迅速に共有する教職員体制の確立、児童相談所との密な連携などが上げられました。

幼少期から同じメンバーでいるため、友人関係が固定化され、自分の思いを語れないことや、進学した中学校での変化に戸惑う児童がいるなど、本校の現状があります。本校は小規模校で比較的穏やかに学校生活が送れています。私自身も全校児童の名前がわかり、児童全員と話す機会があります。教頭として、担任・保護者・地域との連携、学校組織の運営についての責任は大きいです。児童アンケートの『学校が楽しい』と回答する割合が100%という数字に油



断することなく、『この学校で過ごせてよかった』と、本心から言え、毎日、安心して笑顔で

登校し元気に過ごせる学校づくりに努めていきたいです。

第3-②分科会

「教育環境整備に関する課題」に参加して

伊勢市立御園中学校 仲地正俊

第3-②分科会では、鳥羽市立加茂中学校教頭の小西正修先生が、「鳥羽市の防災・減災教育の推進」という主題で提案をしてくださいました。

南海トラフ巨大地震の発生とその被害が危惧されており、特に、海に近い鳥羽市においては、早急な対策を取る必要性に迫られ、県の防災事業を受ける形で、防災・減災教育を推進しているということでした。そこでは、アドバイザーに地域圏防災・減災研究センターの川口淳先生（三重大学大学院准教授）をお迎えし、市内の取組を教頭会研修会で交流し合っていることが報告されました。

鳥羽市では、毎年2～5校が市防災指定校となり、地域・学校に応じた取組を進めており、タウンウォッチングや防災マップの作成などの防災・減災学習、避難訓練、校内環境整備などを行っており、平成30年度からは、鳥羽市独自の防災ノート「明日へのつばさ」を活用し、市全体での防災教育の推進が図られていると報告いただきました。

児童・生徒、教職員の防災意識が高まってきたことや、教頭一人で防災教育を進めるのではなく、教員が主体的に進められるようになってきていることが成果としてあげられていました。

その後は、「地域人材の活用と組織体制づくり」「地域社会とのつながりと地域の教育力の向



上」について、グループ別協議を行いました。コミュニティスクールの立ち上げに係る課題点やコーディネーターの役割の重要性などが話し合われました。また、地域人材の高齢化に伴う新たな人材の募集の難しさや働き方改革など教職員の負担の軽減などの観点からの考察も大切ではないかということも出されました。

最後に、助言者である県教育委員会事務局教育総務課班長 森田潤様より、鳥羽市の提案について、組織的・体系的な取組の重要性や、地域や小中の特性を活かしての工夫、市独自の防災ノートを使つての取組のし易さについてご助言いただきました。

多忙な日々の中ですが、県内各地の仲間と話すことができ、充実した1日となりました。提案いただいた鳥羽市の教頭先生方、役員・地元実行委員の皆様、ありがとうございました。

第4-②分科会

「組織・運営に関する課題」に参加して

志摩市立磯部中学校 金光孝裕

第4-②分科会では、前半に四日市市立南中学校の山下英樹教頭先生から「学校業務アシスタントの活用におけるマネジメント～時間外勤務の縮減に向けて～」というテーマで提案をいただき、後半は、各校や各地域の実態や取り組みについて交流が行われました。

四日市市の全小中学校に1日4時間で週5日、学校業務アシスタントが配置され、「各種書類の印刷」、「データ入力」、「備品・消耗品の整理」等、学校の実情に応じた業務を依頼しているそうです。その成果もあり前年に比べて令和元年度の1学期の教職員の勤務時間は、教職員一人あたり1ヶ月8.7時間も減少しているという報告でした。一方で教職員によっては、学校業務アシスタントを活用しきれない状況もあるようで、勤務時間の縮減をより有効にすすめるためには、教頭が間に入ってマネジメントをしていくことも大切であるという報告もありました。県下の学校においてもスクールサポートスタッフや業務補助職員の配置が少しずつですが増え



てきています。より多くの学校への配置を働きかけるとともに、後半の意見交流にもあったコミュニティ・スクールといった学校支援ボランティアを含めた様々な人材をうまく活用していくことが、これから教職員の勤務時間の縮減の大きなポイントとなっていくということを改めて実感させられました。

助言者からは、これまで教職員が持ち続けてきた「何もかも自分でやらなければならない」、「休みをとることで同僚に迷惑をかけないか」といった意識から、仕事を頼むのも休みをとるのも「お互いさま」という意識に変えていくとともに、それぞれの職員で強みと弱みを補完しあい、地域の力も活用できるような組織マネジメントをしていく必要がある。また、最初は苦情が出るかもしれないが「18時以降、学校の電話に出ない」といった新たな取組を保護者や地域と対話をしながら、まずは試してみることが大切である。時に管理職が矢面に立つことになるかもしれないが、学校長と協力して進めてほしいという助言をいただきました。



「教職員の専門性に関する課題」に参加して

伊賀市立阿山小学校 川上幸穂

2学期も終わりに近づき、教頭として9ヶ月が過ぎました。目の前に次から次へと押し寄せる書類の提出期限や行事等の段取り、保護者や地域の要望等の対応に追われる日々を過ごしています。

そのような中、三重県公立小中学校教頭会研究大会に初めて参加しました。県内から多くの教頭先生が参加されていて、数の多さと笑みを浮かべた余裕のある表情を拝見し、少し圧倒されました。

私は研究課題が「教職員の専門性に関する課題」である第5分科会に参加しましたが、初めに、松阪市立宮前小学校の板谷昌幸教頭先生から「『地域とともにある学校』の実現に向けて」と題して、「社会に開かれた教育課程」の実現や「小中学校の連携」の推進を図るために、自校を含む中学校区のコミュニティ・スクールの取組を通して、今、教職員に必要とされている資質や専門性を高めていると提案いただきました。同時に、多くのベテラン教職員が退職し若手教職員が増えたこと、市町村合併が進み異動が広域で行われるため、地域のことをほとんど知らない教職員が増えていること、コミュニティ・スクールを担当する中堅教員の育成が急務であることも課題として提示していただきました。

その後、「教職員の学校運営参画意識を高めていくための教頭の役割について」と「コミュニ



ティ・スクールを通して教職員の課題意識を高めていくための教頭のかかわり」の2つの柱に沿って、少人数のグループに分かれ話し合いを進めました。

グループでは、「年度当初に校務分掌を均等に割り振っているだけではだめだ、目指す子ども像や取組のゴールイメージを共有する必要がある」、「企画委員会等に参加させるだけでなく、若手が中心となった企画を実行させて『参加して良かった、参加したい』という気持ちにさせていくことが大事だ」、「コミュニティ・スクール等で、地域の思いや願いを聞くことが学校や地域の課題意識を高めることなる」、「コミュニティ・スクール等での地域の方々との出会いが教職員の人間性を豊かにする」などの意見が出ました。

また、「メールなど、どうしても情報が教頭に集まる。情報把握は大切だが、教頭が抱え込んでは何も始まらない。中堅教職員を中心とした活動組織を作っていきたいけれど」、「教頭が転勤してもコミュニティ・スクールの取組を継続したいけれど。」などの悩みも分かち合うことができました。

各グループからの意見交流では、「教職員同士が意思を明らかにし、日常的に意思疎通を図っていく必要がある」、「『できる教職員に任せておけば大丈夫』ではいけない、管理職が若手教職員に考える道筋を示すことが大事である」、「地域の人とやることの良さを感じさせる、地域で育てていくことの大切さを実感させる」、「地域に必要とされる教職員を育てる」などの意見が出ました。

助言者の方からは、山積する社会の課題に社会総掛かりでの教育の実現が不可欠であること、「社会に開かれた教育課程」を実現するには、地

域と学校の連携や協働体制を構築することが急務となっていること等をお話いただきました。そのためには、学校と地域をつなぐ教頭のマネジメント力が必要であり、地域任せにならない質の高い学校教育を提供するためには、教職員の資質や専門性の向上は欠かせないとお話いただきました。

皆さんのお話を聞いて、まだまだ目の前の仕事をこなしていくのに精一杯になっている自分

がいることに改めて気付くとともに、一つひとつの行事の内容や一人ひとりの教職員の様子を丁寧に見ていく大切さも改めて実感しました。

教職員の質や専門性の向上については、自分ができることはまだまだ限られていますが、校長先生や地域の方々、先輩の教頭先生からご指導やご助言をいただきながら、目指す子ども像や取組のゴールイメージを教職員とともに共有しながら取組を進めていきます。

第6-①分科会

「副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題」に参加して

名張市立赤目中学校 吉川英毅

本分科会では、四日市市立河原田小学校の山中茂生先生より、「ベテラン教員の大量退職に伴う若手教員の著しい増加は、本県に限らず全国的に多くの課題を生み出しています。四日市市でも同様の傾向が見られ、ベテラン教員や再任用教諭等を活用しながら若手教員を育成していく組織作りを図っていく必要があります。そこで、各校での若手教員の現状を検証しながら、初めて赴任した学校で教員として身につけてほしいことを明確にし、若手の育成に向けて教頭としての取組を提案します。」と主題設定の理由を説明していただきました。

最初に四日市市内の若手教員の実態と課題の把握を行いました。(1)「指導について」では、『子どもの反応を拾わず、自分のペースで授業を進めている』等、(2)「保護者対応について」では、『家庭訪問に行けば済むことを電話連絡で済まそうとする』等、(3)「危機管理について」では、『教員が、エプロン・マスクなしで配膳をしている』等、(4)「社会人として」では、『あいさつができない』等々が出し合われたようです。そこで、これらの課題解決に向けて早急に対応を進めていく必要性を感じ、教頭としてどう働きかけるのか、組織でどのように取組を進め若手を育成していくのかを研究し、初めての

赴任校で教員としての力をつけ、次の職場でのさらなる成長につなげる取組を行ったと報告していただきました。

特に『若手教員育成ハンドブック』を教頭会として作成したことがすばらしいと思いました。「自分からすすんで元気なあいさつをする」等、当たり前のことから教師として社会人として、気をつけなければならないことや守らなければならないことが書かれています。

また、働き方改革に関わって、「朝や放課後の時間の使い方」や「机の整理整頓(使いやすいデスクにしよう)」等、絵を混ぜながら手書きで、教務が作成して職員に配布していると聞かせていただきました。本当に風通しの良い、温かい職員室なんだろうなと感じました。自分も見習っていきたいと思います。



ジャン&ポール

多気町立外城田小学校 濱 口 秀 樹

「けんかしてないかな…」、「ロープが絡まっていないかな…、外の様子が気になります。キーボードを叩きながら、書類を眺めながら、15分おきに外を眺める日々。運動場の東側、遊具の広場では、ジャンとポールが陽光を浴びながら草を食べています。バリッ、バリッと草を噛み切る音が職員室まで聞こえてきそうです。ジャンとポールとは、近くのケーキ屋さんが飼っているヤギのことで、敷地内の草を食べてもらうために1週間ほどお借りしているのです。

休み時間になると子どもたちが外に飛び出してきました。なかなか近寄ることができず少し離れて眺めている子ども、恐る恐る手を伸ばし体に触れたとたんをブンと振られびっくりする子ども、ポールの背中をなでながら「暖か〜い」とつぶやく子ども、草を引きちぎり口元に運ぶ子ども、背後から近づかれ頭のスリスリ攻撃を受けている子ども、様々な子どもの姿が見られます。「何かあってはいけない」と、休み時間のたびに近くで様子を見ている私はもはや学校の先生ではありません。完全に飼育員です。「これジャンのうんち」、「お土産に持って帰ろ」と真っ黒で豆粒大の糞を手をしている子どもまでいます。初めて学校に来た頃は、



「うわっ！うんちや！」と踏まないように避けていた子どもたちです。放課後になると、隣の保育園からも子どもたちがやってきます。飼育員としてまた出勤します。1日の終わり、誰もいなくなった頃、暗闇が近づく中「メェ〜、メェ〜」と鳴く2頭を置き去りにすることができず、1時間ほど一緒に過ごし、心を鬼にして暗闇を後にします。保護者や地域の方々から、「先生、朝早くから大変やなあ〜」、「暗い中ヤギと一緒にあったなあ〜」などと声をかけていただいています。

ジャンとポールがどんなに頑張っても草を食べたところで、本校の草地はどうにもなりません。しかも、飼育員としての仕事が増え気を遣うことだらけです。ジャンとポールが帰っていくと「無事終わった…」と心の底からほっとします。働き方改革を唱えるのなら、今すぐやめても何の問題もありません。それでも、しばらくすると、「今度ジャンとポールに来てもらう日は…」と考えている自分がいます。子どもたちも「今度来るのはいつ？」と聞いてくれます。生き物がもつ魅力なのでしょうか。今度は11月の天気のいい頃かな…。「待ってるよ！ジャン&ポール」



郡市だより

津市小中学校中地区教頭会の取組

津市立豊里中学校 岡田興昌

津市の中地区には、分校も含め32校の公立小・中・義務教育学校があり、教頭が複数配置の学校もあるため34名の教頭が本会に所属し、活動しています。

活動内容としては、年間5回の会議のほか、年間3回ある津市全体の研修会の内1回を担当して、企画運営を行っています。今年度中地区としては、10月21日に青山高等学校の岡島義信校長先生に『不登校生を理解する』と題して教頭としてできることを講演していただくことを計画しました。

定例で行われる年間5回の会議（写真下左）では、教育委員会の指示伝達、津市全体の教頭会や県教頭会からの報告に加え、全国・東海の研究大会の還流（写真下右）やレポート検討会を行っています。また、中地区全体の情報交換会や、中地区をさらに3つのブロックに分けブロック別の研修会を行ったり、小学校中学校別の研修会を行ったりしています。各校1,2名しかいない教頭であるため、普段それぞれの職場では聞けない教頭としてのノウハウをここでは学ぶことができ、

貴重な時間となっています。私自身、経験が浅いためわからないことだらけですが、「こんなこと聞いてもええんかなあ」と迷うような校長や教育委員会に聞けない微妙なこともここでは先輩や悩みを共有する仲間から教わったり学ぶことができるので大変貴重な場になっています。また、少数職種であるがゆえに職場では比較対象が存在せず、自分を客観的にみることができにくいなかで、あれもこれも「自分がやらねば」と必死になっていることも他校の取組の情報を得ることで「こんな方法もあるのか」と少し気が楽になったり、逆に自分の足りないところがみえてきたり、もやもやしていることの答えやヒント、明日からのやる気がたくさん見つけられる会議となっています。

私がこの会に入らせていただいたときの歓送迎会で、この会を去られる先生が「ホッとできる場でした」としみじみとおっしゃっていただいたのが印象に残っています。「ホッとしながら学び合える」そんな教頭会です。

